

『学びの精神』の課題と成果、これからの展望

日時：2017年11月17日(金) 18時30分～20時30分

場所：池袋キャンパス 11号館2階A203教室

検証報告：松山 伸一	全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チーム リーダー／理学部教授
事例報告：杉浦 雄策	全学共通科目兼任講師
石橋 剛	全学共通科目兼任講師
司 会：中島 俊克	全学共通カリキュラム運営センター副部长／経済学部教授

はじめに

中島(司会) 2017年度シンポジウムのテーマは、「『学びの精神』の課題と成果、これからの展望」です。「学びの精神」とは、全学共通科目における総合系科目の科目群の名称であり、入学後の最初の半年間である「導入期」に展開します。

全カリ(現在は「全学共通科目」というシステムが発足したのは、今から20年前のことでした。既存の一般教育部に代わって、言語と学部教育の補完として役立つものを科目展開するというコンセプトに基づき、創設されました。全学部全学年の学生が自由に受講でき、学生が4年間の学生生活の中で必要と感じたときにいつでもとれるような形式となっているのが最大の特徴です。

2016年度から開始された新カリキュラム「RIKKYO Learning Style」において、全カリ20年の歴史の中で初めて導入教育を取り入れることとなりました。一般教育部を廃止した際、言語以外での導入教育は各学部が担うこととし、各学部はその充実力を尽くしてきました。少数教系の基礎セミナーのような科目が各学部で置かれ、いわゆるアカデミックスキルと呼ばれるもの、本の読み方やレジユメのつくり方、レポートの書き方のようなことはそこで教わるという仕組みが全学部で確立した中で、全カリが改めて導入教育を行う意義が当然問われるわけです。

全学生が履修可能という全カリの特性を鑑みるに、自校教育を行うにこれ以上最適な場はありません。自分が学んでいる立教という大学の起源に始まり、立教が理念の一つに据える人権のこと、あるいは、その成り立ちとは切り離せない宗教のことなどを中核に置いた自校教育を行うことがまず1点。それ以外に、各学科における講義系の導入科目をもう少しかみくだいた形で展開することが決まりました。

具体的なスキルとしては何を教えるか。高校から大学に進学した際、授業形式の違いに違和感を覚える学生が少なからずいます。板書を書き写せば済んでいたノートの取り方も、試験答案の書き方も違います。そこで、まずは講義の受け方を身に付けてもらい、学問の最先端を扱う大学の講義本来の醍醐味を全ての学生が享受できるようにし

たいとの思いで、カテゴリ名を「学びの精神」としました。

こういった教育を行っている先例はほぼありません。私は昨年度と今年度の2年間、「グローバル経済社会を考える」という科目を担当しましたが、悩みながらの運営でした。1クラス200名ともなると、リアクションペーパーのチェックだけでも膨大な労力がかかります。本日のシンポジウムでは、先生方が授業の運営のなかでどういう工夫をしているかを共有し、教育の質の向上に努めてまいりたいと思います。



中島 俊克

検証報告

松山 伸一



松山 伸一

松山 全学共通科目における総合系科目のチームリーダーという立場から、授業評価アンケートに基づくこれまでの成果と、そこから見えてくる課題についてお話しします。

2016年度から「RIKKYO Learning Style」が始まりました。大学4年間で1年次生の春学期の「導入期」、1年次秋学期から2年次生の秋学期までの「形成期」、3年次以降の「完成期」に分け、全学共通科目における3つの科目群から学んでいってもらうという学習体系です。

主に、この「導入期」での受講を想定したのが「学びの精神」です。これと並行して、各学部に用意された「学びの技法」が車の両輪のような形で、この1年次生の春学期に導入教育を行う仕組みになっています。

「学びの精神」は、入学したばかりの学生が、大学での学びを、講義を通して包括的なスキルを会得する科目群です。高校までのように、座っていれば何か知識を詰め込んでもらえるのではなくて、主体的に学ぶ姿勢を涵養してもらい、立教の大学生として、そこに自分の居場所があるという感覚をつかんでもらうことを目的としています。科目は、人文社会から自然科学までと非常に幅広く用意されています。

講義では、リアクションペーパー、小レポートの添削指導などを実施して双方向的な授業を行い、大学院の博士課程に在学している学生などを授業補助者としてサポートに付ける「教育コーチ」という制度を用意しております。また、学生一人一人に行き届い

た教育ができるよう、履修者数は200名の上限を設けました。

自ら主体的に学ぶ姿勢を涵養するということでは、全科目で必ず筆記試験を実施して、積極的に勉強してもらうことを促進しています。筆記試験が成績評価に占める割合は41%以上、残りの部分の設定は科目担当者が自由に設定できるようになっています。

また、「学びの精神」では教育の質的向上を図るために、授業補助者を付けることができます。その中でも、Senior TA (TA: Teaching Assistant) と教育コーチは、基本的に「学びの精神」にのみ用意されているもので、授業規模によらず1名の配置が可能です。教育コーチは、本学以外の大学院の修士課程を修了した方、またはこれと同等の能力を有する方に、Senior TA と同等の業務をお願いできます。実際に授業補助者を付けることで、効果を示すデータが出てきています。

「学びの精神」の具体的な検証結果ですが、2016年度から始まったばかりで、まだ十分に分析をするほどのデータも集まっておりません。今日は現段階で分かっている範囲、大学で実施している「学生による授業評価アンケート」の質問項目のうち、質問Ⅰ-6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」がどれだけだったのかというもの、それから、質問Ⅳ-4「この授業を受けて満足した」か、Ⅴ-4「この授業を通して高校と大学の学びの違いを感じた」と、Ⅴ-5「この授業を通して大学の授業を受ける心構えができた」の4つの部分について行った検証を中心に報告いたします。データは2016年度の春学期と2017年度の春学期とを比較したものを使用しました。

2016年度の春学期ですが、Ⅰ-6の設問項目である授業以外での学習時間は「0.68時間」という数字が出ております。全学共通科目全体の0.82時間、あるいは1年次全学の結果の0.84時間と比べても、「学びの精神」の勉強時間は非常に少ないという結果となっています。本来、「学びの精神」では、双方向の学習体制を通じて、学生に少し負荷をかけてもらうようなことを期待していたのですが、高校から大学への学びのつなぎということで、先生方には徐々に慣れていっていただければいいのかなといった意識で授業を展開されていたのではないかと考えております。2017年度の春学期にはやや改善の傾向が見られましたが、趣旨の徹底がうまくいっていなかったのではとの反省から、来年度以降、「学びの精神」の授業を担当していただく先生方には、シラバス執筆依頼のときに趣旨をもう一度ご確認いただくような文章を添える予定です。

授業への満足度ですが、2016年度春学期の「多彩な学び」が5段階評価（5：大いに思う、4：そう思う、3：どちらともいえない、2：あまりそう思わない、1：そう思わない）で3.93～4.51と高評価を得ているのに対して、「学びの精神」は3.82と低い結果が出ています。2017年度春学期には3.92と上昇してはいますが、全体と比べるとかなり下の部類になるかと思えます。

「学びの精神」特有の問題ではありませんが、履修者50名未満の授業と50名以上の授業の授業評価を見ると、50名未満と人数の少ないほうが、全学的にも満足度は非常に高くなる傾向が出ています。勉強時間が多少長くなっても満足度が高いのか、あるいは、負荷がかかっているから満足度が高いのかはさらなる検証が必要ですが、この傾

向は2016年度でも2017年度でも同様に見て取れます。ですから、「学びの精神」の中でも少人数、授業クラスが小さくなると、満足度は高くなるのではないかと考えています。

質問V-4「高校と大学の学びの違いを感じることができたか」や、V-5「大学で学ぶ心構えができたか」は、「学びの精神」独自の質問項目として用意しました。V-4の評価は高いのですが、V-5の項目はV-4と比べて約0.3ポイント低くなっています。2017年度も依然として0.3ポイントほどの差がありますが、2016年度と比べると若干ながら上昇してきていますので、V-4、V-5のような認識が学生の中でも少しずつ強くなっている印象があります。こちらもやはり50名未満の授業サイズのほうが意識付けが強くなされている傾向が見てとれます。

高校と大学の学びの違いと授業満足度の間には非常に強い相関が見られています。「学びの精神」の履修者50名以上の授業だけを分析しましたところ、授業への満足度が高くなるにつれて、高校と大学の学びの違いをより強く感じたという傾向が非常に強く出ています。また、授業への満足度が高くなるにつれて、大学の授業を受ける心構えができたという傾向も非常に強くなっています。その後の学生生活にどう反映していくのかは、今後の検証を待たなければなりません。学生に学ぶ心構えを持ってもらうという意味でも、満足度の高い授業を提供するのは大事なことだと感じています。

また、2016年度、2017年度の「学びの精神」と、「学びの精神」が始まる前の2015年度の旧カリキュラムとの比較を行うと、ほぼ全ての項目で、旧カリキュラムのときよりも低い評価となっています。このような結果となった1つの要素としては、「学びの精神」は1年次生だけで構成されている授業ですが、旧カリキュラム時には、1年次生から4年次生と一緒に学んでいました。そういう上級生と一緒に学ぶ刺激といったものが減少してしまったことが、もしかすると全体の評価を下げているのかもしれないという気もしています。特に双方向の授業などの場合、1年次生だけで議論するよりも、上級生の意見も加わったほうがいろいろな意味で刺激になり、授業に広がりも出るのではないかと思います。今の制度では、学年間の交流は限界もあるため、これから工夫の余地があるところではないかと思っています。

授業補助者であるTA、SA (Student Assistant)、教育コーチがどのような効果をもたらしているかということですが、授業補助者を採用できる科目のほうが、授業外の学習時間が長くなる傾向が見られます。つまり、その補助者が学生の学習を促進していることが推測されます。ただ、例えばTA、SAへ依頼している業務内容は先生によって大きく異なります。授業補助者の効果については、実際に効果を上げている先生方に対して、我々のほうからアンケートのような形で伺い、検討の材料としていきたいと思います。

「学びの精神」の履修者は、1年次生の春学期ということもあって、出席や授業参加などの態度は優れています。その一方で、授業外の学習時間や授業に対する評価、学習成果はやや低い傾向にあります。この辺りのことに関しては、この後、大人数のクラスで



あるにもかかわらず、非常に高評価を得ている杉浦先生と石橋先生に詳しくお話ししていただいて、参考にしていきたいと思います。

全体として、授業時間以外の学習時間がもう少し増えればと思っています。学生は1年次から、学部の授業とか全学共通科目の言語系科目とか、予習復習に迫られる科目を結構たくさん抱えています。ですから、「学びの精神」で負荷をかけ過ぎると、学生はもうその段階でアップアップになってしまいます。以前の全学共通科目総合系科目担当者連絡会のときにも、本を20～30ページ読んできなさいという課題を出したら、「もう寝る時間がない」と言ってきた学生もいたとの話がありました。やはり1年次生でも、いろいろなところで負荷がかかっていますので、この辺りの加減は非常に難しいかもしれませんが、学生が授業に積極的に参加する仕組みづくりということで、課題の提出などもお考えいただければと思っています。

授業の運営方法に関して、履修者数が確定するまでは、先生方はどういう授業ができるかをなかなか予想できない状況です。シラバスを書くときには、少人数でも大人数でもできるような形で書いていただいていると思うのですが、履修者の規模によって授業運営が変わってくるのは当然のことです。この辺りの影響、もともとたくさんの人数を教えるつもりで授業を用意していたけれども、実際は少なかったからどうしたらいいのかとか、逆に、双方向的な授業を考えていたのだけれど、授業規模が大きすぎてそんなことはできなくなってしまったといったことも声として聞いておりますので、何か安定した仕組みづくりができればと考えています。

2016年度から始めました「RIKKYO Learning Style」ですが、今後とも継続的に、「学びの精神」を中心に解析を進めていきたいと思っていますので、ご協力どうぞよろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。

中島 松山先生、ありがとうございました。データをしっかりと踏まえた構成のご報告をいただきました。

引き続きまして、事例報告として、「ライフマネジメントと学生生活」を担当された杉浦雄策先生にお話しいただきます。どうぞよろしくお願いたします。

事例報告①

学びの精神「ライフマネジメントと学生生活」

杉浦 雄策

杉浦 全学共通科目兼任講師の杉浦と申します。私が担当させていただいているのは、「ライフマネジメントと学生生活」です。スポーツをツールとしてライフキャリアを学ぶことを授業のテーマに定めて、2年間授業を担当しています。

私はずっと陸上競技をしておりました。したがって、それに魅せられて人生がこのようになってしまったと言えるかもしれません。最初は体育学、あるいは体力学という運動生理学の領域に興味をもっていました。しかし、それではちょっと物足りなくなり、40歳を過ぎてからスポーツ医学という視点から、傷害予防ということに興味をもちました。今は医学とスポーツをコアにして、さまざまな分野での研究をしています。

きょうは「授業概要」、「授業運営での工夫」、「授業運営の課題」という3つの話題を提供させていただきます。

まずは「授業概要」です。そもそも私の人生はスポーツそのものです。私自身、「競技スポーツで展開される数々のプレーというのは、人生に相通ずる」という信念をもっています。それに基づいて、「スポーツから学ぶライフキャリア」をテーマに据えて授業を展開しています。

私の授業の目標は、「学びの精神」の趣旨に基づいて、「正解のない問いにいかにかに挑んでいくか」ということです。学生には、「高校までの偏差値教育では、正解のある答えにたどりつくこと、いかにかに正解率を高めるか」ということで評価されてきた。しかし、大学、あるいは社会では、正解のない問いに対して、いかにかにベストなあるいはベターな答えを出していくのかといったことに挑んでほしい」という話をしています。授業はスポーツを基軸にしています。まずスポーツを知ること、気付き、学びがあって、それを将来に活かしていく過程で、ライフマネジメントをどのように高めていくかを目標にしています。

授業の内容はいたって単純です。学生は、1時間半の授業で教員がずっとしゃべっていると、寝てしまったり、ほかのことをしたりします。したがって、冒頭で話するのは長くて20分です。教材としてDVDやスライドを使い、あるいは資料を持ち出して、関連する事項を説明します。その後、学生がそれらをどのように考え、ディスカッションするかという形式で授業を進めています。

1週目のオリエンテーションは入念に行います。90分間丸々かけて、「この授業での目標や、どういう計画で進めるのか」という話をします。特に私が注意していることは、「履修者が200人の非常に大所帯の授業になっていますので、きちんと意思統一を図ろう。自分はどうしていくので、きちんとついてきてほしい」ということを、学生に明確な形で伝えます。そして、「みんながきちんと同じ方向を向いてくれないと、授業がスムーズに進まなくて困る」と言います。注意事項を板書しておしまいとか、プリントを読んでおくように指示するだけでは、上手に伝わらないこともあるので、私から「授業のやり方を理解した上で授業に参加してもらいたい」と最初に言うようにしています。そうしたら、1年目、2年目とも「先生は怖い」とリアクションペーパーに書かれてしまいました。しかし「それぐらいで良いのかな」と私自身は思っています。

もう一つ伝えなければならないこととして、Active LearningとInteractive Learningがあります。私は、学生には積極的に授業に参加してもらいたいと思っています。「参加する」というのは、教わるのではなく、学ぶ精神、まさにこの言葉のとおりです。教わるのは高校まで、大学へ入ったら自ら学んでほしいのです。授業には受動と能動という違いがあるという話もした上で、まずはActive Learningを目指してもらいたいと伝えます。それから、相互通行ができるような学習スタイルを望んでいるので、「積極的に発言をしてもらいたい」ということを促しています。

次に、高校生までは何か問われたとき、とりあえず感想を書けば、それで終わりという形で済みますが、大学生になった以上は、きちんと論文形式でレポートを書けるようになってもらいたいと思っています。そのために、大学で配布している「Master of Writing」というリーフレットを学生に持参させ、これらを活用しながら、レポートの書き方をしっかり指導するようにしています。

2週目からは事例を5つ設けて授業を進めていきます。取り上げる事例はもちろんスポーツが基軸となっています。5つの事例を設け、それらをそれぞれ2週間使って授業を展開していきます。

事例の1は、3年後に開催される東京オリンピックを取り上げています。1週目は、オリンピックには、ただ見るだけではない楽しみ方があることを伝えます。実はこういう側面があるので、「見方を変えると非常に面白い」といった話を、資料を交えながらしていきます。2週目は、それをもとに、今度は学生同士でディスカッションしてもらいます。幾つかのグループに分かれ、こちらで設定したテーマに従って、グループごとでどう考えるかを話し合ってもらいます。私は、「夢をもって生きなさい」という話をよくします。「スポーツでもたらされる有形無形の財産とは何か」。その中で、オリンピックは、「自分の夢に向かって突き進むことについて教えてくれる、非常に有意義なイベントである」ということを伝えて、そして、「あなたの夢は何ですか」と、自分の夢について改めて考える機会となるようにします。

事例の2は、「幸齢化」です。これは字が間違っているわけではありません。「幸齢化」という、幸せに年をとるという考え方があります。プレメディカル・ケアというのは、

我々が研究で使っている造語です。医者にかからないようにして、養生して、健康で、幸せに暮らしていくための構想が必要なのではないかという考えに基づいています。そもそも、スポーツをするということは、「健康のためだけに身体を動かすのではなく、健康であるから、自分のしたいことに向かっていける」という、自己実現の要素が含まれています。2週目は、ただ運動するのではなく、自己実現を図るために身体を動かすことの重要性を理解し、「自己実現とは何か」を考えさせています。

事例の3は、「競技スポーツの中には、フェアではないこともある」という話をする中で、ドーピングについて考えていきます。なぜドーピングがいけないのか、健康面だけでなく、倫理的な問題点についても議論を展開していきます。その中で、授業におけるマナーとルールを学生に決めてもらいます。どこの授業でも問題になる、「おしゃべり、携帯電話、居眠り」この3つについて、「自分たちでマナーとルールを決めなさい」とグループディスカッションをさせます。きょうは、私の授業のTAにも来てもらっています。私たち2人は、その決めたルールに「文句は一切言わない」と宣言します。毎年、面白くなります。携帯電話は、「してはいけない」というのが大方の意見です。おしゃべりも「絶対にだめ」。居眠りは分かれるところで、「寝ていても迷惑はかけないだろう」というのと、「そうは言っても、やはりほかの人の妨げになる」という意見など、いろいろ出てきます。あるいは、「そもそも寝ていたりするのは、講義をしている先生に失礼ではないか」という意見が出てきます。しかし、この授業以降、寝ている学生がいたら、隣の人がついて起こそうとするという日常を目にするようになります。

TAの村本宗太郎さん（コミュニティ福祉学研究科博士課程）は法学部出身ですので、2週目の授業時に、法律の面から、「ルールとは何なのか、モラルとは何なのか」ということを説いてもらっています。学生は、その説明を聞きながら、授業を受けるマナー、ルールについて、自分たちで決めていこうという形で進めています。そういった自分のごく身近な日常から、「共に生きる、協力して働く、共生と協働ということについて考えよう」というのが、この回のテーマとなっています。

事例の4は、2015年のラグビー日本代表が南アフリカ代表に勝ったときの戦い方の話をしています。まず、戦術と戦略があって、「この2つは意味が違う」ということを伝え、ビデオをみてもらいます。「なぜ日本代表チームが強豪チームに勝ったのかを考えてもらいたい」と問いかけます。これからは武器（強み）をもって世の中に出て行って、どういう戦略を立てて社会に挑んでいくかを考えるのは大事なことなので、自身を確立して、人生にどう挑むかを考えてもらっています。これは、「自分自身を理解すること」だと。入学して、大学で勉強して、世の中へ出ていったのでは、人生はつまらないと教え、自分が何を術として、何を戦略として策を講じていくということが、どういう意味をもつのか教えていきます。

事例の5は私自身です。私は20年前に、陸上競技のリレーにおけるアンダーハンドパスの先駆的な研究をいたしました。それが実を結んで日本代表がオリンピックや世界選手権でメダルをとりました。実はこれが「イノベーション」による結果だと言われ

ていますが、なにも、ものすごいことを成し遂げたわけではなくて、ちょっとした発想の転換で研究をしてみたら、そこに思わぬ発見があったという自分の経験を伝えていきます。私の研究スタイルでもあり、生き方の1つでもあります。物事を違う方面から考えていくと、思わぬことに出くわしたりするのが面白いのです。「Thinking outside the Box」という考え方で、物事を外からみて考えてみると、思わぬ発見がある。こういったものを経験することは非常に刺激的です。自己マスターという表現があります。これは自己理解を高めて今の自分を把握し、それと将来に求める自分像との間にあるギャップを埋めていこうという考え方で、この考え方に基づいて自分を鍛錬していく、何かに熟達していくということをこれからの人生の中で経験してみたり、そういう思いで人生を歩んでいくと面白いのではないかという話をしています。

5つの事例を終えた後の授業では、「目標・夢をもつことは大事」だということに触れて、最後はまとめという形で授業を終えています。

ライフマネジメントというのは、夢・自己実現・共生協働・自己理解・自己マスターによって形成されていくと非常に面白くなるのではないかと思います。だから、こういったことを考えながら大学生活をどう過ごすのか、そして、その後の人生にどういう影響を与えるのかということを考えてほしいと学生には問いかけます。「正解のない問いにどう挑んでいくか」ということの醍醐味を、これから経験してもらいたいということで話を進めています。

以上が授業運営の工夫ですが、5つの事例をそれぞれ2週使って進めるにあたり、「1週目でこちらから話題提供をして、2週目で気づきがあったり、学びがあったり、これを将来にどう活かすかということを考えてもらう」という方法で、インプットとアウトプットを意識して実施しています。もう一つは、やはりActive、InteractiveなLearningの両方が必要だと思うので、アウトプットも、自分自身でいろいろ考えて出すほかに、相手がどう思うか、グループでディスカッションして自分の意見をどのようにまとめていくのかということで、多面的な角度からものを考える姿勢を身に付けてもらいたいと考えています。

評価は、平常点と筆記試験で行います。点数の配分ですが、授業に積極的に参加しているのかをみるために、グループディスカッションが25%、コメントペーパーや課題の出来が25%、最後の筆記試験を50%としています。筆記試験は1問で、「夢のある人生を歩むためのプロジェクト、未来予想図」というテーマで、「自身の戦術と戦略にしたがって未来予想図を書いてみなさい」という問題で実施しています。これが50点満点です。

TAの村本さんには、ディスカッション時に学生たちへ助言や示唆をしてもらっています。教員からだ、どうしても上から与えるという形になってしまいがちなので、年の近い先輩からのほうが、学生には効果的なのではないかと感じています。

また、授業後は村本さんと一緒に振り返りを行い、「学生の理解があまりよくなかったようだけれども理由は何だろうか」とか、「去年と比べてどうか」を分析したり、学生

に直接どうだったのかを聞いたりしています。そういったことを反映させながら、単元ごとに、また1年目と2年目で積極的に変化をもたせています。

授業運営の課題は、2つあります。履修者数が多いため、ActiveとかInteractiveな教育活動が非常に困難な現状にあります。理想を言えば、100名ぐらいの人数なら、授業がもっと充実するのではないかと考えています。

次に私の授業の目標は、「正解のない問いに対しての挑戦なので、時間を区切って正解率を高めていくといった試験はあまりなじまないのではないかと感じています。むしろレポートで、学生には「もっとしっかり時間をかけて考える」という能力を見極めたいというのが正直な考えです。学生の力を測るのに、一律に試験を実施するのではなく、授業の性質や特徴に合った方法で行うことを考えてもいいのかもしれません。

中島 杉浦先生、どうもありがとうございました。先生には、オリジナリティあふれた素晴らしい授業を行っていただいています。最後におっしゃった課題は、我々にとっても課題であると受けとめました。

それでは、続きまして、「人文学からの学び(文学)」を担当していただきました石橋剛先生、どうぞよろしくお願いいたします。

事例報告②

学びの精神「人文学からの学び(文学)」

石橋 剛



石橋 剛

石橋 私は2016年度と2017年度に「学びの精神」の「人文学からの学び(文学)」という科目を担当させていただきました。

今回、このような発表の場をいただいた大きな理由の1つが、「学生による授業評価アンケート」の結果がかなり高得点だったからと伺っています。どういったコツや工夫があるのかを教えていただきたいといわれたのですが、実感といたしましては、一生懸命取り組んでいただけで、気が付いたら高評価をいただいていたという状況です。自分でも、コツとか工夫とか、よく分からないのですが、私が講義で行ったことをお話し申し上げることで何かしら皆さんの参考になるならば幸いです。

私なりに考えてみますと、経歴の中で1つ思い当たる点があります。私自身、看護学校で2009年から8年間、文学の授業を担当しています。看護学校の授業というのは大

学の授業と違いまして、学生が自分で選んで受けるということではなくて、もうカリキュラムに組み込まれていますので、強制的に受けさせられているわけです。しかも、国家試験とは関係のない文学の科目などというのは、基本的にはあまり興味を持ってもらえないという前提で授業をさせてもらっています。その中で、どうすれば看護学校の学生に、面白いとか、受けてよかったと思ってもらえるのかということを経験して8年間必死で模索してきました。そういった経験が、「学びの精神」の、1年次生が対象という初学者向けで、私の場合は新座キャンパスで開講しておりますから、文学部以外の学生にも文学的なものに興味を持ってもらえることにつながったのではないかと考えています。

具体的に言うと、講義では文学作品を考察対象として取り上げるのですが、それについての説明をするときに、できるだけ抽象的な説明を避け、専門用語みたくないものは排除し、なおかつ、受講者の共感を喚起して、何か学ぶことができたとか、受けてよかったと思ってもらえる授業を目指しています。

授業のサブタイトルには、「日本近現代文学のなかの『病と死』」とつけました。授業の目標として、「文学作品を考察することで、多様な死生観や人生観、人間像について理解し、作家や作品に関する知識を身に付けるだけでなく、受講者それぞれの視野を広げることを目的とする。文学作品を対象として、考察のテーマを主体的につかみとり、自身の見解を明確に文章化する能力を身に付ける」ということを掲げ、シラバスにも記載しています。

授業内容としては、「病」や「死」に関連する文学作品、主に短編作品を紹介して講読していくということを行いました。「病」と「死」というテーマに限定するのではなく、「家族」とか「日常」、「戦争」などのキーワードにも着目しながら、それぞれの文学作品を考察していきました。同時にまた、作品が生まれ出された時代背景も踏まえつつ、現在の常識や死生観などとの相違点、共通点についても考えました。

毎回の講義ではコメントペーパーを学生に書いてもらいました。書く内容としては、可能な限り自分自身で作品内容から見出してほしいということ、授業内でも何回も何回も強調して言いました。

各回の内容ですが、1回目から14回目まで、文学作品をプリントして持っていきます。基本的に、メインの作品1つと、プラス短い作品を1つの二本立てで紹介する形式です。文学作品は食べ物と一緒に、学生によっても嗜好があるでしょうから、メインの作品が面白くないというときに、じゃあ、サブの作品について何か考察を書いてもらうという目論見もありまして、二本立て、時には三本立てで講義を行いました。

講義の流れですが、まず、作品と資料を配付します。履修者数が150名ぐらいいる上に、作品とレジュメという具合に配付物の多い授業です。そのため、全員に全てが行きわたるまでに10分ぐらいかかってしまいます。そこで、TAに補助を頼み、10分間で配付を終えてもらいました。遅刻者についても、後ろのほうで対応してもらいました。その10分の間に、私のほうは前回の授業で出た質疑に答えるようにしていました。

資料配付の後には、コメントの紹介も10分ほどで行いました。10人くらいの優れたコメントをレジュメに載せて紹介するという形式です。その後で、授業テーマに関連する短いエッセー、もしくは短い詩、短編小説などを音読して解説するというのも、やはり10分程度で行いました。

次に、作品を黙読する時間というのを15分程度設けました。そして、参考資料を紹介しながら、その作品についての解説を35分から40分ぐらいかけて行いました。コメントペーパーの記入は、最後の5分から10分で行います。14回の授業を通して、こういったメニューで行っていました。

運営上の工夫ですが、3つ、思い当たるものがあります。

まず1つは、「教材を精選する」ということです。私の感覚で言いますと、授業の成否の7割から8割ぐらいは教材で決まってくるのではないかと思っています。学生には精選した教材を読んでもらうように努めました。教材を決めるに当たっては、15分程度で始めから終わりまで読めるような短編を探しました。それを印刷して配付し、黙読の時間をとります。

この黙読の時間を15分とるとということも、試行錯誤の末にたどり着いた方法です。看護学校でも大学でも、前もって配るとか、音読をしてもらうということを実施していたのですが、あまり効果がありませんでした。読ませても理解してもらえないことがありました。特に前もって配るということをしますと、今年度も1回だけ行いましたが、怒らないから正直に言ってごらんといって手を挙げさせると、3分の1ぐらいの学生が読んでできていませんでした。しかも、50人ぐらいの学生が教材を持ってこないということになります。教材忘れは想定していましたが、前もって50部ぐらいは準備しておいて配り直しましたが、その分、余計な時間がとられてしまいます。学習効果を高めるために、まずは15分静かに集中して読んでもらう環境をつくることを心掛けました。

その場で読んでもらうと、学生の反応がよく分かります。例えば、プリントをぱっとめくるめくり方が強いとか、食い入るように読んでいるとか、泣いているとか、前もって読んできてもらった場合では分からないことがその場で分かるということもありました。それはこちらとしても大変勉強になりました。寝ている学生がいたら、そばに行って肩をたたいて起こし、体調が悪いわけではないのなら、このページのこの文章だけでもいいから読んでごらん、みたいな指導もできましたし、私語もなくなりましたので、これはよい方法だったと思っています。

選書の方法ですが、まず、自分自身が読書体験を重ねてきた中で、二十歳前後のときに読みたかったなと思うような作品を選びました。また、看護学校や大学でのこれまでの講義で扱った作品の中から受講者の反応がよかった作品を優先的に選び、ときどき新しい教材を交えながら作品を紹介しました。

このような形で教材を精選しましたが、その教材を解説するときにも、私なりの方法があります。その教材を解説するときには、話の流れに従いながら、本来の読書行為に

近い解説を行いました。例えば、全部読んでしまってから、「この作品はこうだね」という振り返り読みとか、まとめ読みはしないようにしています。物語を頭からずっとたどりながら、「この文章があるからこうなるよね」とか、「ここでの登場人物の登場の仕方はすごく好印象で書かれているよね」とか、「この描写が効いているよね」みたいな形で行うことによって、文学作品の内容的な価値、それから構成的というか、形式的な価値を同時に学生に提示できたのではないかなと思います。

テキストの流れに従って解説をしながら、可能な限り多くの問いかけをしました。例えば、『いのちの初夜』という題材を講読したときには、ここに「いのちと人間」と書かれてあるけれども、どう違うのかなといったたぐいの発問をたくさん行っています。私自身も答えが分からないときには、それを正直に伝えます。私も一生懸命考えていますがよく分からない。だから、みんなで一緒に考えてくれないかという具合に、とにかく発問をするということをしていました。意味深な文章があれば、掘り下げます。「この文章はどういうことを意味していると思いますか」という投げかけは、結構たくさん行ったのではないかなと思います。

文章を読むだけだと、眠くなったり疲れたりしてしまいます。書画カメラというものが教室にはありましたので、それを活用できたのもよかったのではないかなと思います。これを使えば、写真集や図録を見せることができます。例えば、国立ハンセン病資料館の図録などはとても参考になりました。時には絵本なども見せました。書画カメラというのは本当に活用のしがいがあるなど実感したところです。昨年の「学びの精神」の授業のときに、学生のほうから、授業の中にそういったものもあったほうが面白いのではないかという提案がありましたので、今年は取り入れてみたところ、学生に高評価をもって迎えられたということで、指摘してくれた学生には本当に感謝をしています。

履修者の主体的な取り組みを促すということも行いました。例えば、コメントペーパーを一生懸命書いてもらうためにはどうしたらいいかということです。まずは、書いてもらったコメントペーパーの中で、優秀なものをレジュメに載せて紹介するということを10分間で行いましたけれども、そのコメントがどういうふうに優秀なのか、このコメントのここを進めると、こんなふうにもっと素晴らしくなるということ、受講者に分かってもらうようにきちんと説明しました。この10分間は、コメントを絶賛する時間というような形で使っていました。その結果、意欲的にコメントを書くことができたという、自由記述のアンケートの回答がたくさん寄せられ、その点はとてもうれしく思いました。

それから、1つの作品だけじゃなくて、作家のほかの作品とか、関連作品、参考文献なども紹介して、できるだけ自分で主体的に読むことを促していました。

コメントペーパーの書き方についても指導を行っています。このように書けばいいんだよということ、[コメントペーパーの書き方]としてまとめています。基本的には、文学作品の読み方は自由だから、自由に書いてほしいと言いました。自分の経験とか、自身の関心とか、そういったものに重なるところがあれば、そこを膨らませて考察を書

くんだと熱く語ったりしましたが、ときどきそのように書けない学生がいます。そういう学生に対して、発見や解釈や意見などを書けばいいという形で提示しました。「発見」についても、自分はこういうふうと考えていた、作品にはこういうふうに書かれている、その作品を知ったことで、こういうふうに変った、あるいは、変わらなかったということを書けばいいのではないかと提案をしました。

また、「解釈」というのは、作品の中で抽象的に書かれてあるところを自分の言葉で具体的に説明することだとか、具体的に解釈の根拠も示すことだということも学生にアドバイスしました。あとは「意見」ということですね。作品内容についての登場人物の考えなんかについての賛否とか提言などを書けばいいのではないかなとアドバイスしています。

どうしても書けないときのガイドラインとして、「コメントペーパーの書き方」を示していますが、基本的には自由に書いていいと言っていました。ただし、自由といっても、自分勝手なことを書けばいいのではなくて、文章化したことによってほかの人の共感を呼び起こすとか、ほかの人が感動するということを目指してごらんといったような指導をしています。そうすることで、自身の思考を表現する方法が分かるのではないかなと思ひ、その部分は特に強調しました。

その結果、授業評価アンケートでは、「いろいろなことがたくさん書けて楽しかった」といった意見をいただきました。「自分はどんな人になりたいのか」といったことを考えさせられました」といううれしい意見も寄せられました。

今後の課題といたしまして、より細やかな指導を行うために、履修者数は100名以下のほうが望ましいように実感しました。より細やかな指導とはどういうことかといいますと、例えば、コメントペーパーを添削して返却したりとか、あるいは、私の授業が高評価だといっても、中には、初めから学ぶ気がないし、終わってから何を学んだかの形跡がないという学生もいましたし、途中で来なくなってしまう学生も数名いました。もうちょっと人数が少なければ、そういった学生たちにも、こちらのほうから何かアクションもできたのかなという反省点がありましたので、そういう意味でも、100名以下のほうがいいのかなという実感を持っています。

昨年と今年と1年生の授業を担当させていただき、本当に新鮮に感じたのは、履修者が「真善美」への志向が強くて、こちらのほうで心洗われる思いがしたといった経験、実感がたくさんあったということです。履修者それぞれが持っている真善美への志向を尊重し、教員は黒子になってその向学心を後押ししてあげるといった講義を目指して行った結果、ある程度の成果が得られたのではないかと考えています。

中島 石橋先生、ありがとうございました。この授業が成功された一番のポイントは、作品を黙読する時間を15分設けて、そこでしっかり読ませたということではないかと思ひます。また、そのような技術的なことだけでなく、授業の心構えを説いたり、学生のアンケートにあった「自分はどんな人になりたいのかをとて考えさせられます」

ということこそ全学共通科目の総合系科目そのものの目指しているところであり、本当にこの成果は素晴らしいと考えます。

質疑応答・討論

中島 それでは、これよりシンポジウムの質疑応答および討論を始めます。それぞれのご報告に対して、もっと技術的に細かい部分を聞きたいとか、あるいは、もう少し大きな視点からの問題でもいいですけども、自由にお出しただければと思います。

参加者 杉浦先生の授業運営について具体的な部分を聞かせていただきたいと思います。授業の進め方として、1週目に提示し、2週目にディスカッションをされるのですが、200名ぐらいのところではどのようにディスカッションをして、どのような方法で最後のコメント用紙の課題を出していたりするのかというところをお聞かせいただければと思います。

杉浦 ディスカッションにつきましては、事例が全部で5つございますので、それぞれの事例に応じて、学生の雰囲気を変えながら進めています。具体的には、200人なら10人ぐらいのグループを20つ作り、時間を決めます。そこから1人発表者を出して、簡単に1分ぐらいで報告してもらおうとか、あるいは、ディスカッションの後にそれぞれでコメントペーパーを出してもらおうとか、場合によっては、これは2週間にわたってきちんとレポートを出させたほうがいいのか、そういったことで対応しています。

参加者 グループのメンバーは毎回一緒でしょうか。

杉浦 1回目のオリンピックの話は、好きな者同士で組みなさいというふうにしたと思います。どうしても組めない場合は、TAの村本さんに手伝ってもらってグルーピングを行いました。場合によっては、10人ではなく5人グループにしたり、事例に応じて変えています。基本的に、同じ人と組むことがないようにしています。

中島 授業補助者の方が評価のためのチェックをされているということですが、具体的にはどのような方法だったのでしょうか。

村本 杉浦先生の授業のTAの村本です。コミュニティ福祉学研究科博士課程の後期課程に所属しております。

授業が進むにつれて、スポーツという学生にとって関心が強いテーマということもあ

るかと思いますが、第2回目ぐらいから、かなり積極的に、「先生、このレポートの書き方はこれでいいのですか」とか、「書き順はこういう構成でいいのですか」と言ってくる学生が出てきました。そういう学生や、個別で尋ねてくることはしなくても、ディスカッションの中でリーダーシップを取っている学生だとか、ディスカッションをうまく回しているような学生というのは、授業に対して非常に積極的な姿勢で臨んでいるのが見えますので、そういう学生たちについては、杉浦先生と相談した上で、高く評価するという考え方をとっています。

中島 レポートは半期で何回ぐらい出されていますか。

杉浦 事例5つのうちの2本です。

参加者 成績評価ですが、杉浦先生がおっしゃったように、定期試験だと決まった時間で書かなければならないという制約が出てきますので、こういった授業にはそぐわないというご説明はそのとおりだと思いました。筆記試験では、どう学生を評価しているのか、何か基準みたいなものがあれば教えていただきたいと思います。

杉浦 戦術、戦略というのにこだわっています。これはことしの授業なのですが、経営学部の学生から、戦術と戦略は、習う分野によって意味合いが違ってくるというような話がありました。私は最後の時間のまとめでも、私の授業では、戦術というのはその時の武器（強み）になるもの、戦略というのは武器を持っていかにか戦うかということ、人生に挑むという視点で書きなさいということをお酸っぱく言いましたが、そこがややふやな学生には、まずA以上の評価は与えません。要するに、授業に参加していなかった、聞いていなかったということになりますので。今年に限っていえば、戦略は偉い人がする会議、戦術は部下がすることというようなレポートが多かったです。そんなことは1回も言っていないので、それを書いた学生の評価はB以下でした。

あとは、レポートの書き方で、背景・目的・方法・結果・考察・結論というように段落を区切って書くということを最初に教えているので、それが書けていない場合については評価も低くなります。そういった判断基準をとっています。

参加者 私は立教大学の中で学生の学びの成果を評価する部局におりまして、この「学びの精神」について、お三方にそれぞれお尋ねしたいと存じます。

まず、松山先生、「学びの精神」は、1年次生の春学期に取ってほしいということでスタートしたわけですが、上級生と学ぶことによる知的な刺激が低いということは、実は、あまり想定をしておりませんでした。逆に、旧カリキュラム（全カリ）の授業というのは、2年から4年の学生が横にいて、ある種のピアラーニングみたいなものが、場合によっては可能だったのかなということを改めて思った次第です。先生のご報

告のデータからは、直接そういうサジェスションはいただけなかったので、先生が実感として、上級生と学ぶことによる知的な刺激が低い可能性があるとお考えになった理由をぜひお答えいただければと存じます。

杉浦先生と石橋先生の話聞いて、私が素朴に思いましたのは、やはり今の大学で学ぶこと、あるいは立教大学という場で学ぶことの一番大事なことは、よい授業に触れることだということでした。そこはなかなか言語化しにくいところではありますけれども、この「学びの精神」をご担当なさるに当たって、具体的に授業を行っていく中で何かお考えになったところ、ご努力なされたところがあれば、ぜひともお答えをいただきたいと存じます。

松山 「学びの精神」は相当に力を入れて準備周到に始めました。私たちも非常に高い評価を期待していましたが、実際に始めてみますと、評価は期待外れなほどに低いものでした。原因は何だろうか議論する中で、やはり1年生だけで学んでいることの影響があるのではないかと意見がありました。

理学部の場合を考えてみても、上級生との交わりはほとんどありません。全力の教育の場というのは、いろいろな学部、いろいろな学年の学生が一堂に会しますから、やはりそういうところでの交流というのは、有形無形問わず、学生にとってはかなりの刺激があるのではないかと私は思っています。

石橋 「学びの精神」という科目を担当させていただくことが決まってから、説明会にも参加して心構えなども伺っていましたので、それは初回の授業のガイダンスのときに学生にも伝えて意識の共有化を図りました。私の場合は文学ですから、解答があつてとかいうことじゃなくて、自分の考えをちゃんと文章化して提示して、その考えに、いかに共感とか説得とかを呼び起こすかが大事なんだよということはずっと伝えていました。

立教らしさということでは、私の場合、新座キャンパスで開講しておりましたので、現代心理学部映像身体学科の学生が3分の1を占めている形です。ですから、例えば脚本の話とか映画の話を変えたりします。もっと言えば、学生のリクエストに対して、できるだけ答えていく。学生が、こういう作品を紹介してほしいといったら、必ずそれは紹介します。そういった双方向的な授業を展開すれば、授業全体のカラー、また、立教らしさといったものも出てくるのではないかと思います。

杉浦 私の授業では、正解のない問いに挑むということを大きな目標に掲げることが学ぶことの意味だと説いています。また、とにかく夢を持ちなさい、夢を持って生きていくことで初めて人生は面白くなるよという問いかけは強く意識しています。

立教大学生としてというのは、私も考えていたことではありますが、今年面白い機会がありました。東京六大学野球で立教の野球部の優勝がかかった試合があるというの

で、その前の週に、とにかく行ってきなさい、行った上でコメントを書いてレポートを提出しなさいという課題を出しました。母校を意識することは非常に大事なことで、そうすることで見てくるものが増えるからということをやったら、何人かは行ってきました。さらに、優勝パレードがあるという話を聞いたので、パレードに参加してみなさいと言ったら、これにはものすごい反響がありました。「最初は行く気はありませんでしたが、先生に言われて行ったら、こんなにも大学がまわりの人から応援されているのだということをもてすごく意識した」、「立教大学生として誇りに思えることが見つかるいい機会でした」ということでした。もちろん行けない学生もいますので、その場合には、どこかで何か誇りになるものを、違うもので書いてみなさいということで代用のレポートを課しました。結局、3分の2ぐらい、約140人がパレードに参加したようです。参加した証拠に自撮りで写真を撮ってきなさいといったら、ちゃんと撮ってレポートにまとめて出していました。

参加者 お二人の先生のお話を聞いて、私も受けてみたいと思うほど感動しました。松山先生からご報告があった点についてですが、授業時間以外に学習した時間があまり増えていないということに関連して、お二人の先生が授業時間外の学習時間を増やすという点でどのような工夫をされたかをお伺いできればと思います。

杉浦 工夫になるかどうかは分かりませんが、ちょっと考えないと駄目なことか、あるいは2人とか3人でまとめて1つのレポートを書かせるようなことをしました。そうすると授業時間外で会わざるを得ません。そこで大事なのは、SNSなどのやり取りではなくて、会ってきちんとディスカッションするということです。そういうことを意識させて、わざとグループでさせるような工夫はしています。

石橋 私は一点突破主義で、とにかく充実した90分を提供することを第一に考えて、この2年間教えてきました。ただ、自分のアンケートを見ても分かりますが、授業外であまり勉強していないということを深刻に受けとめて、来年度もし同じような科目を担当させていただくのであれば、きちんとそういう課題を学生に課さなければならないと今考えています。現段階では、そういうことに関してはあまり工夫できていないのが正直なところです。

中島 ありがとうございます。質問の尽きないところではありますが、そろそろ閉会の時間が迫ってまいりました。最後に、佐々木先生から締めの一語をお願いします。

「学びの精神」に期待すること

佐々木 一也

佐々木 きょうはお三方の先生から、大変に充実したお話を伺いました。「学びの精神」は大学に入った学生が、大学生として授業に出る心構えをする上で一番重要な授業だというのが私自身の個人的な考えです。

事例報告では、杉浦先生は、自分の人生の戦術と戦略を考えさせるといこと、それもスポーツという、学生にとっては取り組みやすい素材を上手にお使いになりながら、非常に深いところを考えて、自分を見つめるといことをさせる。これは大学としても基本のことだと思いますが、そういうものがきちんと行われるような授業が展開されているということがよく分かりました。

石橋先生は、大変細やかな文学、文芸作品を読むという授業をしておられて、学生のコメントにもあった「自分はどんな人間になりたいのか」という、文学を通して非常に人間にとって深く広いことを扱っています。文学は死生観、人生観、人間像、社会像、そういったことを深く広く考えさせる力のある素材です。それであるがゆえに、面倒くさい、読んでも面白くないというような印象を持つ若い人が多いかと思います。それをどうすれば15分で読んでもらえるかというところで非常に工夫をして、本来の自分の人生を見つめる、大学生の4年間のうちに、自分の人生の戦術と戦略を固めていくような思考の手掛かりを見つける、しかも積極的に、自分から進んでという形に持っていく理想的な授業をしていただけていたのではないかと感じました。

きょう学ばせていただいた一番重要な点は、お二人とも学生の目線に立った授業をしておられるといことだと思ます。自分は学生時代に何を求めているだろうか、文学だったら何がいいのだろうか、あるいは、自分はスポーツを通してどういうふうになりたかったのかという学生の目線に立った授業をしておられるというのを非常に強く感じました。自分が学生だったころも、しっかりと90分座って人の話を聞き、何かをノートするなどといことはしたことがないわけで、きちんと飽きさせないように、必要なことを、時間配分を考えて、内容もいろいろ豊富なバリエーションをつくりながら授業を行う。授業の構成が非常にしっかりしていっしやいます。

何よりも、教材研究が非常に丁寧に行われていることに驚きました。ビデオにしても文学作品にしても、それぞれのテーマに合うように時間をかけて厳選した教材を使っておられます。しかも学生が提出したリアクションペーパーのいいものを紹介して、こう



佐々木 一也

いうふうを書くんだ、こういうふうを感じる人もいるんだ、自分もそういうことがあるなど思わせて、次第に授業に自分から入っていくような工夫が随所に行われている授業であると思いました。

我々大学教員というのは、ともすると、これは教えておかなければ、こういうことは分かってもらわなければということがどうしても優先してしまいます。

学生から見て、自分にとって本当に必要だと思って積極的に取り組んでいけるということよりは、この分野ならこれとこれは必須というようにどうしても考えがちです。きょうはそこについてもう一回考え直してみる必要があるということを強く教えていただいたように思います。

特に「学びの精神」の授業設計では、教えたいことではなくて、学生が何を学びたいと思っているのかをきちんと理解していく力を教員が身に付けていかなければならないという見識を、全学的に広めていきたいと考えています。

来年度以降に向けて「学びの精神」をより実質化し、秋学期から授業を受けている学生の目の輝きが変わる状況をつくってまいりたいと思います。本日はそのために、手掛かりとなる多くのヒントをいただけたと思います。お二人の先生方、そしてデータの分析をしてくださりました松山チームリーダーに改めて深く感謝を申し上げたいと思います。本日はどうもありがとうございました。